

わたしの青い鳥物語



第16回

「届けたい想い」

中村由香（なかむら・ゆか）さん（55）

“音楽”と“音が苦”

「普段は連絡の来ない息子から、この時期になるとメールが来るんです。“今年も始まるね”って(笑)」

そう朗らかに笑うのは、今年8回目の参加となる中村由香さん。過去には息子さん2人も青い鳥へ参加、旦那様も毎年客席から見守るなど、青い鳥は家族の年中行事ともいえるイベントに。幼い頃から歌ったり踊ったりすることが大好きで、物心がついた頃からピアノを習い、高校大学は音楽科に通い、卒業後は小中学校で教鞭を執った。常に音楽と二人三脚の生活。しかし、思いが強いからこそ時に自分を苦しめる事もあり、暫く音楽から遠ざかる日々もあった。

「体調を崩してしまって、一度音楽を封印したんです。その後母が病気になり、介護のためにヘルパーの資格を取ったりと生活環境が少し変わって、母がお世話になっていた病院が音楽療法なども取り入れていたんですね。それで、少しずつまた音楽と関わるようになりました」

そんな折、たまたま訪れた劇場で手にした青い鳥のチラシ。音楽や合唱に馴染みがあるからこそ、自分のカラーに合うかな？と躊躇いもあったという中村さん。しかし、持ち前の行動力で新しい扉を開いた。

「合わなかったら仕事が忙しいんでごめんなさい！とお伝えしようと。それが、初回で歌声やお話を聞いてイチコロというか…楽譜を貰って、無我夢中でお稽古して、学生時代でもこんなに熱心にやった事ない！というくらいでした。仕事から帰ると遅いので、近所迷惑にならないよう部屋で布団をかぶって歌ったり(笑) この歳でまたそんな日々がやってくるなんて、夢にも思わないですよ」

長年音楽に携わってきた中村さんにとって、新しい楽譜、知らない曲に出会う事自体が新鮮な喜びでもあった。懸命に音を取り、先生方の話に耳を傾け、学ぶ喜びを全身で感じる日々。四六時中、頭の中にはメロディーが流れていたという。

「あのまま学校勤めをしていたら青い鳥にも出会えなかったと思うし、紆余曲折があったからこそここに来れたんだと思うんです。それも運命ですよ。何より、音楽を嫌いにならなくて良かったなと思いました。音楽の原体験というか、子どもの頃って、音楽が嫌いな子なんていないですよ。そういう純粋な気持ちを青い鳥が思いださせてくれました」

歌声を通して通い合う心

必死に取り組んだ初年度、2年、3年と積み重ねていくうちに新たな気づきや深まりも生まれ、気づけば8年。かけがえのない仲間との出逢いにも恵まれた。

「心を通わせ合うのに、音楽はとっても有効ですよ。歌いながら、みんなで手を繋いでいる感というか。互いの声を聴きながら“ずれてもいいよ！ここは私が支えるけん！”みたいな目に見えないコミュニケーションがあったりする。心が繋がるからこそ絆も深くなるし、テクニックだけじゃなくてみんなの心が通い合った時に、お客様にも届く歌声になるのかなと思います」



仲間たちから贈られた青い鳥アイテム。毎年少しずつ増えていっているそう。
ワークショップが終わっても、いつも青い鳥を身近に感じながら
“出逢った人、そこにある幸せに感謝しています”と中村さん。

そうして紡ぎあげた今年だけの歌声。今年は、万感の思いを込めてステージへと上る。

「昨年、ヘルパー先のあるお宅で、体の不自由な旦那様の介助をしながら耳元で鳥の歌を歌っていたんです。奥様も歌は大好きだけど、24時間旦那様の介護で自由には動けない。でもやっぱり聴きたいわ〜と、本番を観に来てくださって。旦那様も初めて長時間一人で留守番をされたんですよ。そうしたら、家に帰って奥様があまりに興奮して話すものだから、旦那様も“僕も行きたかったな〜見たかったな〜”って。無理と分かっているながらも“じゃあ来年来てね”って言うってんです。でもその後、旦那様は天国に行ってしまうと…。息子も今は県外だし、大切な人が遠くにいる分、伝えるってどういう事だろう？と、より考えるようになりました。今年は客席に、奥様と、天国の旦那様も来てくださると思います」

